

第二十七回 西川鯉りさいたる

*綱上手出

綱「かように候う者は 頼光朝臣に仕え奉る渡辺源氏綱にて候 このたび羅生門におもむき仇なす鬼のかいな切り取りしはこれ綱の武勇にあらず ひとえに君の御威徳かかる悪鬼は 七日のうちに來たりて 必ず仇なすことあらば 門戸を閉じて物忌みなさん」

斯かる悪鬼は七日の内に 必ず仇をなすなりと 陰陽の博士晴明が考文にまかせつつ（合）綱は七日の物忌して、仁王経を誦誦なし 門戸を閉ぢてぞ居たりける *伯母花道出
かかる所へ津の国の渡辺の里よりも 尋ねて伯母のきた時雨 紅葉の笠も名に愛でて（合）錦をかざす古郷の（合）老の力や杖つきの字の姿をも（合）うしとは言はでひかれつる
綱が館に着にけり 門の外面に佇みて

伯「いかに綱津の国の伯母がはるばる参りたり 此の門開き候へどく明け召されい」

内には綱の声高く

綱「はるばるとの御出なれど 仔細あつて物忌なれば 門の内へはかなはず候」

伯「何門の内へは叶はぬとな」

綱「是非に及ばず候」

あら曲もなき御事やな（合）和殿が幼き其の時は 自ら抱き育てつつ（合）

九夏三伏の暑き日は 扇の風にて凌がせつ 厳冬素雪の寒き夜は（合）

襖を重ね暖めて 和殿を綱と言はせし事 皆自が恩ならずや 恩を知らぬは人ならず
エ、汝は邪慳者かなと 声を上げてぞ泣き給ふ

伯「つれなき和殿にあいそが尽き 再び面を合わさぬぞ」

会わぬと言えど会いたさに 行きつ戻りつ 幾度となく 後を見返り杖を引き
是非もなきなくゆきすぐれば

さしちに猛き渡辺も あくまで伯母に口説かれて 是非なく門を押し開き

綱「のうのう伯母御前御待ち候へ」

伯「何この伯母に待てよとな」

綱「このまま御帰し申さば 余りに本意なく候へばとくこれえへ 御帰り候へ」

伯「さては対面致すとか」

綱「いかにも」

それは嬉しきことなりと 老いを忘れて立ち帰り つまづきまろぶ手を取りて
奥の一間に 伯母を敬い頭を下げ

綱「只今は不思議の失礼仕って候 先ず御酒一献聞こし召し下さりましょう」(盃事)

綱「伯母御前御よ一さし御舞い候へ」

伯「めでたき折なれば 舞はうするにて候」

綱「それがしお相手仕る」

御酒の機嫌を仮初に 指す手引く手の末広や(物着)

伯「あら面白の山めぐり」

まず筑紫には彦の山 讃岐に松山降り積む雪の白峰や 河内に葛城、名に大峰
丹波丹後の界なる 鬼住む山と聞こえしは 名も恐ろしき雲の奥(舞の合方)
なつかしや

綱「いつに変わらぬ手振りの牙え」

伯「何はさて 鬼の腕を切り取りし その夜の様子を語り候へ」

綱「さてもこの度 御前にて羅生門にいづるといふ変化を見届け印を立てんと」

君より賜る銘刀の ひげきりと言う太刀をはき
時しも一天かき曇り 降り来る雨は春ながらさじんを流す

綱「ひと吹きさつと夜嵐に 共に後ろのかたよりして」



我をば宙へ引き上げたり

綱「これまでなりと切り落とし 鬼の腕を持ち帰り君の御かんに預かって候」

綱は名をこそ上げにけり」

伯「してしてそのかいなは」

綱「すなわちこれに」

と 唐櫃の（合）蓋打明て伯母の前にぞ直しける

其の時伯母は彼の腕を ためつすがめつ繁々と眺め眺めて居たりしが

次第次第に面色変り（合）かの腕を取るよと見えしが忽に鬼神となつて飛上り

（立回りの合方）

破風を蹴破り現れ出で あたりを睨みし有様は身の毛もよだつ許りなり

いかに綱我こそ茨木童子なり 我が腕を取返さん其の為に 是まで来ると知ざるや

綱は怒りて早足を踏み（合）

斬らんとすれども虚空に在り（合）いかにかなして打取るべしと思へど次第に黒雲掩ひ

鬼神の姿は消失せければ 彼の晴明が勘文に背きし事の口惜さよ

なお時を得て打取るべしと 勇み立たる武勇の程



【解説】

渡辺 綱が戻橋で小百合と出会い、彼女が鬼女であることを知り、立ち回りとなり片腕を切り落とす「戻橋」という舞踊があります。「綱館」はその続編で、その腕を取り返す為に、鬼女が綱の伯母に化けて館を訪ねるところから始まります。綱は伯母を館に入れまいとしましたが、情けに負けて入れてしまいます。そして次第に唐櫃の中に片腕が入っていると気づき、それを掴んで消え失せます。

40年以上もご指導いただきました元 NHK エグゼクティブチーフプロデューサーの駒井邦夫先生が去る7月21日に突然お亡くなりになりました。毎回数々先生に相談して来たので、昨秋「私に綱館は無理ですね？」とお尋ねすると、いつもの調子で「まだそんなこと言ってるのか？やろうと思ったら何でもできるんや！」と雷を落とされました。何とか又、雷が落ちないように頑張りたいのですが・・・